



嘲 ワ

笑 ヲ

わ

れ

男

る

祖母の危篤を聞いた。

朝5時を回ったころだった。

電話の相手は弟だった。昨日から病院に詰めていたらしい。

始発に乗れば、もっとも近い大都市の病院に入院している祖母の死に目に、或いは間に合うかもしれない。

妻に一声かけようとベットの隣をみて、暫く家を開けていることを思い出した。

師走の盆地は一段と冷える。駅まで急ぎ足を踏んでも、汗一つかかない。

禁煙、分煙の風潮の元、ホーム端に移動した灰皿の傍で煙草を喫んではいると、男が一人ホームに現れた。嫌な気分になる。すぐさま逃げ出したい。男はちらりと私を見た。途端に、男は私を嘲笑し始めた。

くすくす くすくす けたけた けたけた

男の体は、ぼたぼた、ぼたぼたと崩れはじめ顔面の肉がはがれるのを端緒に、嘲笑う表情と声を一段と大げさにしながら、体中の皮膚と表皮に癒着した組織が、服もろともに黒々とした、とても人間の血とは思えぬ、血だまりに、ぼとぼと散らばってゆく。

血だまりは、くすくすと心底愉しそうに嘲笑う顔を中心に、手袋のようにはがれた手だったものや、脚だの内臓だと、その周りを包んでいた、纖維の腐り崩れた背広の上下や冬物の上着などをバラバラに乱雑に載せずするりずるりとはいよって来る。

目を背け、うつむく。嘔吐感が臓腑を駆け巡り、涙腺が痛いほど収縮し、声を出で泣き出したつた。

今日も、私の精神は平常に不調だ。

今日、あとどれだけこれを見なくては、ならないのだろうか。

幻覚とわかついても、つらくてたまらない。家に帰り、布団をかぶつて眠りたくなつた。

煙草はもう根元まで燃えていた。灰皿にねじ込もうと視線をめぐらすと、血だまりの向こうに、きれいな姿勢で中空に座る、人間の全身の骨が見えた。

灰皿に煙草を差し込む前に、もう一本取り出し、一本目の残り火で火をつけた。

向こうのベンチには、身なりのよさそうな男が座つてゐる  
どうやら、幻覚はおさまつたらしい。

子供のころから、私はこの疾患に悩まされている。道端でそれ違つた人間や、学校の教室で傍にいた人間が、骨を除いて変質し、私の精神を責め立てながら這い寄つてくる。

変質した何かは、いかに私がおかしいかを順序立てて論証するように、私を嘲笑する。

ただ、骨だけがそうならない。もし骨ごと変質していたら、これが幻覚と自覚できなかつただろう。骨のみが、症状に悩まされる時に、底から剥離して締め付けられる私の精神を復元させる。

祖母のことを思い出そうとした。

祖母には、幼いころから可愛がられていた。両親が共働きだつた私は、

学校が終わって、友人と遊ぶことのない日は、祖母におやつを出してもらつたり、本を読んでもらつたりと、随分世話を焼いてもらっていた。

しかし、それらの記憶は、まるで感情移入のできなかつた映画のシーンを無理やり思い出すかのような作業を伴わなければ思い出せなかつた。

ただ、反復されることで、摩耗して行く磁気帶のように、いつしか思い出から、記憶、知識へと後退してしまつという、徒労のみを伴い、誘発して、ここ数年の老人から死人に変質して行く祖母の姿のみが時間軸を無視して脳裏をよぎり、苦痛と倦怠に苛まれ、私は頭を切り替えようと思つた。だが、一度とらわれた思考は、意志の懇願など聞かずにあれこれと彷徨する。

もの心つくころの、最も古い記憶は、大笑するそぎ落とされて黒い血に浮かぶ父の顔面だ。そのせいか知らぬが、私は父にはちつともなつかぬ赤ん坊だつたらしい。私を寝かしつけるのは、いつも祖母の役目だつたらしい。母はちょうどそのころすでに年子の弟を孕んでおり、弟が生まれてからも、まだ赤ん坊の弟にかかりきりだつたため、祖母が私の人格形成を担つたと言える。

当然ながら、祖母とて聖人ではない、むしろ俗物的人間だつたと思う。私に言つて聞かせる教訓は、いかに金錢を大切にし、家財を築くかであり、世間に恥をかかないようにどうふるまうかであつた。だが、家族は誰も、一度は、母や、随分仲の良かつた弟であれ、幻覚の中で私を責め立てたが、祖母がそうなることはなかつた。それはたとえ祖母が老人性痴呆で猜疑心と悲觀の塊となつたころでも変わることはなかつた。

もし、私の症状が、私の嫌悪、恐怖といった、目の前から対象の排除を求める感情の発露であるのなら、私は祖母を好んでいたのだろう。

幻覚の見えないときは、いつも余計なことを考えている気がする。

かなり向こうのカーブで列車らしき影が、こちらに前照灯を向ける様子が見えた。

ホームの端のここからでは、先頭車両の停車位置からも距離がある。ま

だ半分しか吸っていない煙草を、灰皿のタールのような水面に落とすのは惜しい気がした。

急いでストローで底に残ったジュースを吸い取るように、何度もフィルターを啜り、水平向きの橙色のつららを煙草でこしらえ、難儀して妙に狭苦しい灰皿の格子にねじ込むころには、とつくに列車はホームに入りドアを広げており、駆け足で乗り込む羽目になった。

始発の空っぽの客車に安堵しながら、先頭車両の一番後ろの席の後方側の端に腰を落ち着け、ぼんやりと外を眺めていた。眺めるといつても、見えるのは、外が暗いとわかる黒と、そこに写る無人の車内と自分の間抜けな顔くらいのものだ。

自分の間抜け面を見ないように、目線を先頭の方に見やると運転手の背中が目に留まった。

背中を向けていても、しばしば幻覚に解体されてしまうことも、あつた。今はい、最も症状のひどかつたころは、そんなこともまま見られたようと思う。

自分でも、人並みの社会生活を、よくこれまでこなして來ることが出来たものだと思う。そのころは、自分が実はこの世の真理を見ており、人間を生きながら解体できない凡人とは自分と違うと思い上がったころもあつた。

自分が誰にも、狂人であると知られずに、周囲を偽つていられたのは、おそらくは並外れた引っ込み思案という、社会生活に不利な条件と、有無を言わすことなく、私を引っ張ってくれた、その時、その時ごとの友人たちのおかげであろうと思う。

私には家族以外に、大恩ある三人の人間がいる。

一人は、小学校の同級でRという男だ。私の通っていた小学校には、二時間目と三時間目の間に通常の十分でなく二十分間の休み時間があった。大人となつた今から思えば、つくづく不思議なことだが、小学生のころ、二十分といえば随分な長時間であった。

奇縁あつたのか、小学校時代六年間同じクラスだつたRは、ガキ大将と学級委員を足して二で割らなかつたような性格の男で、その二十分休みでは、晴れの日は、校庭でドッヂボールなり、けいどうなり、ミニサッカーなりと外で遊ぶことを主宰し、クラス全員が参加することを強制した。

祖母の発案で、幼稚園に通つていたため、大人数の他人が、解体され、混ぜ合わさつた肉塊が床一面に、嘲笑するという事態に会わねばならない、家族以外の他人の充満する場所での集団生活に、私はある程度の免疫があつた。

何もかもが剥がされ、抜け落ちた、白骨の幻覚を見ると正氣を取り戻すという、法則を自覚したのもこの頃である。初めて大人数分の、解体と、笑い声を幻視し幻聴したわたしは、うつむき声も上げずに泣いていた。家中で、家族がそなつた時は逃げ出し、誰もいないことの多かつた祖父の書斎の本棚の隙間に潜り込み、そのまま寝込んで、祖母に発見されるとが常だつたが、周囲を笑う血海に包囲された状態ではそもそもいかなかつた。ちょうど園児たちが、教室のなかで、遊ぶ時間だつたと思う。担当教諭は泣いている私を慰めに、膝をつき、どうしたの、と問いかけてきた。

血海の真ん中で、ひとときは大きな肉塊となつて私を責め立て、楽し気によく笑っていた彼女ではなく、真っ白な、丸みをおびた骸骨が話しかけてきた。その途端、教室の中は正常をとりもどし、周りには、私に関心など向けず、思い思いに遊び、はしゃぐ園児たちがおり、瞬きを挟む間もなく、教諭も、年若い女性に戻つていた。

それから、何度も経験により、私は園側から引っ込み思案の社交性のない、問題ありの手のかかる幼児という評価をいただくと同時に、私自身は、幻覚からの復帰の方法を学習しつつあつた。周りの人間が崩れ落ち、私を責め立てるときは、兎に角、白骨が現れるまで、待つ。これは肉塊と血海の幻覚の中では探しても見つかるものでもなく、しかし待つていれば

必ず来るものだつた。幻覚の苦痛が消えるわけではなかつたが、しかしだ一つの光明だつた。以来、幻覚に苛まれると、ガイコツこい、ガイコツこいと念じながら待つた。

そんな状況で、友達などできるはずもなく、孤独な数年を幼稚園で過ごした後、新たに入った小学校も、同じように過ごすと思つていた。それを変えたのが、Rだつた。

Rは、小学校に入学してから初めての、二十分休みのとき、周囲にいた人間を適当に選別することなく呼び寄せた。その中に私も含まれていた。すでに幻覚に落ちようとしていた私は、彼の白骨に手首をつかまれ、人ががたりん、お前も来いと有無を言わさず正気に引き戻され、そのまま、校庭につれてゆかれた。

けいどうをするぞ、いんじやんしよう。とR言つた。

この地方で同年代の誰かと外で遊ぶという経験のなかつた私は、“けいどう”が警官役と泥棒役にわかれ、変則型の鬼ごっこであることも、“いんじやん”がこの地方でのじやんけんのことであることも知らなかつたが、流れされるがままにしていれば、適応できた。

以来彼は、最初に遊んだその集団を中心として、二十分休みの遊びの何らかの遊びを主宰し、いつしかその初期メンバーとして二十分休みの遊びの中核に私も勘定されていたようである。

彼は、兎に角何もかも積極的で、押しの強い少年であり、仕切り屋で、常にリーダーでいようとした。自己中心的であつたとも言つていいかもしれない。それ故に、対立したり、彼を嫌う人間が出てきたが、超が付くほどに消極的な、私は彼以外に友人を作ることもなく、六年間クラスが同じだったという幸運もあり、漫然と彼の腰巾着に甘んじ、小学校六年間をそれなりに平穏に過ごした。互いの家に遊びに行くという、これまた私にとって、新鮮な体験をするなど、私としては、彼とは親しい関係でいたつもりだつた。なによりも幸運はRとともに過ごす時間、私は幻覚を見ることはなかつた。つまり小学生の間、幻覚を見たのは、通学中や、家でしばし

ば、学校でも一人でいる間だけで、かなり限られたものだ会った。

そんなRは、私と同じく、地元の中学に上がったのだ。

私も、おそらくはRも、それなりの友人として中学も過ごすと思つていた。だが、そうならなかつた。

原因は私にある。ある日、樂し氣に新たな友人と談笑するRを見たとき、彼を含めたその場の人間たちが、解体され、血海に散らばつて私を嘲笑しはじめた時、私は幼いころのようにはげ出した。

それからも、Rは私を気にかけていたらしく、何度か、ちょうどどこの年頃の人間が覚える夜遊びなどに、私を誘つてくれたりしたが、私としては、中学の廊下のコンクリにへばりつき、嘲笑する彼の剥ぎ取られた顔面が、頭について回り、正気のときにも、彼が恐ろしく、どうにもよそよそしくしてしまうようになつてしまつた。なんやかやと私を気にかけてくれる彼を、避けるようになり、いつしか誘われなくなつたとき、私はまた孤独になつた。

そのころ私は、自分のこの症状が、どうも特殊で自分にしか起ららない現象であるらしいということをはつきりと自覚するほどの分別を、鈍い頭ながら持つようになった。

ちょうど、そのような年頃でもあり、他の凡俗どもとは違う、自分こそこの世の真実を見通している、などという稚拙な高慢とともに、毎日休み時間に、教室で幻視する解体され、まき散らされた、骨抜きの肉塊を、吐き気とともに、楽しむようになった。床や机や椅子に散らばる、血に浮かぶ顔面たちの嘲笑を、逆に嘲笑するようになった。内心でひきつった笑みを持ちながら、次の授業が始まり、白骨の教師が授業を開始して正気を取り戻すまで、ぼんやりと眺めている、血の氣の失せた半泣きの私は、傍から見れば随分と気持ちの悪い存在だったに違いない。

列車が県境のトンネルに入った。気圧の変化で引き出された鼓膜を、唾

を飲み込んで戻した。ここまでの中の駅では、誰も乗つてこなかつた。空が白み始めるころに停まる駅ではすでにこの列車も始発ではない、人は乗つて来るだろう。

Rについて今では、顔すら思い出すことが難しくなつてしまつた。ただ、苦い記憶、どうしても修復しようのない破綻を引き起こした後悔だけが、残つてしまつた。

転機があつた、人生三一人目の友人Sとの出会いである。

二年の夏休みに、読書感想文の宿題が出た。

濫読家だった祖父の書斎には、多くの種類と、十分な量の本があつた。中学が終わると、私は急ぎ足で帰り、そこで書物の世界に耽るのが常であつた。ひと昔どころかふた昔前の流行小説や、歴史もの、新書版の雑学書など、簡単な部類の本が私の好みだつた。本ばかり読んでいたせいか、それまでの定期試験は、国語が突出した成績だつた。読書感想文なども、適当にそこから選んだ小説で、でつち上げた。

それが、表彰されてしまつた。戦前に流行つた、まだ旧仮名使いのその小説について、戦雲たなびく時代背景を照らして、適当に一夜で書いたものだつたが、どうもそれが平和教育に熱心な市の教育委員の琴線に触れたらしい。

学校の全校集会で表彰され、今度は市の方での表彰があると、担任に職員室で言われたときは、柄になく浮かれた。私の高慢が絶頂となつたのはそのころである。

市の会館で、何人かの私と同じような学生とともに集合させられた私は、客席の最前列の端に、他の学生たちとともに並んで座らされた。表彰式はまず受賞者全員がその作文を朗読し、その後表彰の運びらしかつた。聴衆が入る前にリハーサルを、無人の客席に向けて簡単にすませた。

何人かの学生の感想文を聞き、ついに私の番となつた。

演台に上り、聴衆に向いた途端、私はパニックに陥つた。バブル期の放漫財政で無駄に贅沢に作られたその会館は、客席がすべて、赤いいかにも高価そうなシートが張つてあつた。

だから、私ははじめ聴衆が一齊に消え失せたのかと錯覚した。

錯覚通りならばどれほど良かつたか、すぐに私は気づいた。会館全体、文字通り血の海に見えた。よく見ると、腸のような桃色の塊や、肺か脾臓か脂肪かしれない黄色の塊などが散らばつてゐる。それらの色で斑になつてゐる会館いっぱいの血海は、やがてぶるぶると震えながら、幾百といふ人間の顔を徐々に浮かび上がらせてきた。幾百の顔は一齊に目と口を三日月型にゆがめると、しんと静まつていた会館全体を振動させる大音声で笑い始めた。

私は嘲笑に耳をふさぐことも、幾百の顔から目を逸らすためにうつむくこともできず、ただただ立ち尽くしてゐた。

どれだけ、そうしていただろうか。数分はそうしてゐた気がするが、あとで時計を確認し、一人当たりの持ち時間から考へるに、あるいは数十秒だつたかもしれない。

「頑張れ。」

と、女の声が聞こえた。その方向に、なんとか目を向けると、私が座つていた当たりに、一体の白骨があつた。

現実に引き戻された、一つだけ空いた席、の隣の片方に座つた少女が、私をみていた。

彼女が叫んだらしい。学ランのような金ボタンに詰襟の随分変わつた制服だなど、見当違いのことを考へた私は、はつとして自分の作文を読み始めた。

無事読み終えた私は席に戻つた。その途上に恩人とすれ違い、小声でありがとうと言つた、彼女は微笑んでくれた。

それがSとの出会いだった。

市での式の終わり、解散の運びとなつた時私はSにもう一度礼をいった。Sは、誰でも上がる事はあるよと私を慰めてくれた。

帰りの方向は、Sと私の中学が隣だつたこともあり、途中まで同じだつた。

Sの顔は、私には女にしか見えず、声も女の甲高い声だつたため、私はなぜ、彼女が下にズボンをはき、男子学生のような格好をしているか、そして一人称が一般に男が使うものか謎だつたが、私には初対面で聞く勇気はなかつた。

感想文で受賞するだけに、Sも読書家らしく、好きな作家について語り合つた。といつても、Sの言う最近の作家のことは、私は全く分からなかつた。正直に知らないと言うと、今度貸してあげると言う。そこで次の週末に市立図書館で待ち合わせることとなつた。

小学校のときRと遊ぶ時はもつと活動的な遊びをしていたため、私はその時初めて図書館なる場所に行つた。残暑の中、結構なの距離を歩くことは、それなりにつかれる作業だつたが、私は心が躍つてていることを自覚した。その途上は珍しく幻覚をみなかつた。通学中は頻繁に見る通行人らしき、肉塊がずるずると血に乗つてくすくすと笑いながら過ぎ去つていく姿は、いつも油断しているときにやつてくるものなのに。

Sの貸してくれた小説は中々に面白かつた。その次の週末にまた図書館で待ち合わせて、小説を返したときにそう告げると、Sは喜々として、同じ作者のシリーズものがあるといった。私はそれも読んでみたいが、こちらが借りるばかりでは申し訳ない、何かこちらもおすすめのものを持ってくるよと約束した。

Sとの週末の図書館の会合はいつしか慣習となつた。好きな本の話をし

て、後は各自図書館内で本を読んだり、持参した本を貸しあつたりした。互いに下の名前も知らず、電話番号も交換せず。会うたびに、また来週ここで、という非常に前時代的で互いに一步引いたものだつた。しかし、それは私にとって心地のよいものだつた。*ひ*がつねに男装なのもと何時しか聞く機会を逸したが、どうでもよいことに感じた。

だが、その習慣が、何回か互いの都合で、待ちぼうけをしたり、会わない週があるなどしても、師走にまで至つた時、私は不安を覚え始めた。

私は学校で孤立しているが、*ひ*はほぼすべての週末私と会う以外どうも予定はないらしい。あの市民会館での失態以来、高慢は鳴りを潜め、逆に劣等感に支配されていた私は、*ひ*のような人物に、友人がいないとは思えなかつた。そうなると私は彼女の時間を浪費させる存在ではないかと不安になつた。

冬休みの初日、ちょうど週末だつた。来年度からは公立学校は完全週休二日制になるらしいという朝のニュースを聞いた後、いつものように歩いて図書館に向かうとき、私は*ひ*と会う日だというのに、幻覚を見た。冬の低くなつた青空の下で、寒そうに体を振動させながら這いざる幻覚は吐き気を覚えるほど苦痛だつた。

*ひ*は私よりだいぶ早く来ていたのか、小刻みに体を震わせながら、律儀に図書館の正門前で待つていた。

*ひ*は、おはよう、寒いねと言つた。うん、とだけ私は答えた。

貸してくれた本返すよ、やつと読み切れた。*ひ*はカバンから私がかなり前に貸した本を取り出した。戦時小説すでに絶版しているそれを読破するのに、随分時間がかかつたらしい。

旧仮名使いはいまだに慣れないので、旧字体はさらに大変だよ、でも面白かった。今の小説にない趣があるね。

朗らかに語る*ひ*に、楽しんでもらえてよかつた、寒いし中に入ろうと言ふと、今日は違うところに行かないかと言う。

「行くつて、どこに」

「神社」

まだ表情は笑っているが、眼が悲し気だった。つい数瞬前の笑顔ももしかしたら、朗らかでなく、乾いていたのかもしれない。

Sの後について、市の中央の人通りの多いところから、農地がまばらに見えだし、県境になつていてる山間に近いところまで来た。

Sは少し足早になつた。小説のことを話していたが、そろそろ話題が尽きてきたころ、農地の中に浮かぶ孤島のような、鎮守の森が見えた。

「ねえ、君は靈感つてあるかい」

神社は昔Rとその友人と一緒に遊んだことのある場所だつた。ちょうどSの中学校の校区と私の中学の校区の境界らしい。参道に平行な三人掛けベンチに何を話すでなく、一人分開けて、互いに端に座つていると、Sはそんなことを言い出した。

私の見る幻覚は靈感の一種だろうか。宗教について論じた本に、原始宗教における巫覗は精神疾患や薬物中毒によつてみた幻覚を神としたという論があったため、そのような意味では私も靈感もちといえるかもしねい、と思つた。

「ないよ」

嘘をついた。いわゆる靈感が見るものは、死者の意志や姿だろうし、なによりもSならば、幻覚のことを話してもよいのではないか、という誘惑は甘美なものだつたが、もし狂人と幻滅された途端、この関係は破綻してしまうと思つた。

「ないか、残念」

自分にもないと告げてから、彼女は続けた

「詩人は狂える靈感により、地獄に収まらぬほどの悪魔をと、天上よりあふれ出る天使を見る」

「何かの引用か」

「オリジナル。でも、きっと何かの引用の継ぎはぎさ」

「僕たちは、本を読むのが大好きだけど、読むに足る何かを書けるわけじやがない。書けたら素敵だろうけどね」

「そうだな」

話はどうやら文学論のようで、やはり嘘について正解だったと、私は思つた。詩人の靈感にしては、私を苛む幻覚は、あまりにお粗末だ。単なる疾患、機能障害だろう。結構な雑学書を読んだが、精神疾患についての本は、ついに手を出す気は起きなかつたなど、ふと思つた。

「でも、あつたらいいとは思わないかい。靈感じやなくともいい、超能力とか、異世界に行くとか、タイムスリップとかSF やオカルトチックなことか」

「そうかな」

「いいよ、素敵だ。嫌な日常に比べたら」

たとえ如何なる非日常も、いずれ日常に飲み込まれる。最近読んだ評論を思い出した。きっとどこに行こうと日常になる。そして、苦痛もつくるのだろう。人間である限りの運命のようなものだ。運命と書いて“さだめ”と訓読してもいい。そのことを話そうと思ったが、やめた。

「大晦日、一緒に初詣にここに来ないかい。」

しばらくの沈黙の後、不意にひが言つた。

「初詣か」

オウム返しに言つて、思案した。我が家は基本的に初詣に行かない。しかし、友人と初もうでに行くと言つた私に、祖母は嬉しそうにいつた。

「R君とかい。あの子、元気にしてるのかい」

「いいよ、行こう」

大晦日、深夜に出ていく私を、起きていた祖母がとがめた。しかし、友人と初もうでに行くと言つた私に、祖母は嬉しそうにいつた。

「R君とかい。あの子、元気にしてるのかい」

Rと疎遠になつたと知らない祖母の言葉に、後ろめたさと、悲しさで言葉につまりつつ、適当にはぐらかし、別の友人だとだけ告げて家を出た。

「いつてらしやい、氣をつけてね、といううれし氣な、祖母の見送りの言葉に泣きたくなつた。

場所は先日の神社だった。Sの家はここに近いらしい。神社は正月だというのに、誰もいなかつた。周囲が農地で、伝統を大切にしていそうな土地に見えるのになど、不思議に思つたが、人込みでなければ、幻覚を見ることもないとの内心感謝した。

「このあたりは、仏教が強くてね、この神社は実質放置されているのさ、神社を統括する役所から人は時々来てるみたいだけどね」

鳥居の前で、ここで年が明けるまで待とう、といつて立ち止つたSは説明してくれた。

「神社本庁は役所じやないぞ、あれは宗教法人だ」

「そうなんだ、役所みたいな名前なのに」

「戦前までは役所だつたがな」

他愛もない会話をしながら、腕時計で日付が変わるまで待つた。

深夜零時を二人共の時計で念入りに確認し、鳥居を一礼してくぐつた。先日眼の端に見た手水舎の水は、随分濁つていたことを思い出し、清めは省略した。後ろの道路の街灯だけで照らされた参道を進み、薄明りの中、少々難儀しながら賽銭を投げ入れた。

靈験あるならば、幻覚を消してくれ、生まれて初めて神に祈つた。

Sは随分熱心に祈つていてるようだつた。かなり長めの祈念を終えた彼女の眼尻は確かに濡れていた。

何を祈つたのかは聞けなかつた。Sも私に問うことはなかつた。

境内のベンチに、先日と同じように座つてゐると、遠くから談笑する声が聞こえてきた。どうも自転車に乗つてゐるらしい。金属のきしむ音とともに、その集団は鳥居の前でおのの自転車を停めた。逆光でよく見えないが、どうも同年代らしかつた。

幻覚は見たくなかった。

神頼みは通じなかつたらしく、彼らはぼとぼと地面に崩れ落ちた。嘲笑は鎮守の森を震わせるほど大きく響いた。

視線をSに戻すのが怖かつた。Rの時と同じく、せつかくの友情を失うことには嫌だつた。

「もう帰らないか」

後ろから、Sが言つた。

「ああ」

つとめて振り返らないようにして、Sを背後に鳥居まで歩き出した。幸いSは幻覚と私を結んだ直線のちょうど反対のあたりに立つて、私の視線に入らないように歩いてくれている。視界に入らなければ、大丈夫だ。Sが解体されることはない。自分に言い聞かせながら歩いた。けたけた、くすくすという血海に浮かんだ肉塊たちは、中心の顔面で私を嘲笑しながら、ずるずると進み、私の進路を遮つた。

顔面たちは、急に怒りの面相になつた。

初めてだつた、肉塊が嘲笑以外の、表情を表すのは。どうしようもなく立ち止まつていると、不意に一つの白骨が立ち現われ、私に殴りかかってきた。

かばうでもなく、それを頬骨のあたりにまともに食らつた。随分な激痛で、脳髄が揺れた。しかしそれでも、ただでさえ辛い幻覚から正気に戻してくれたことが嬉しく、思わず笑みがこぼれた。

五、六人の少年、少女だつた。

私を殴つたらしい、少年はなにか怒鳴つていたが、滑舌が悪いのか聞き取れなかつた。

どうも怒らせてしまつたらしい。謝ろうかと思つたが、こちらは悪いことなどしていいつもりだつた。しかし幻覚を見つけていたときに、何か言われ、それを無視したならば、私に非がある。いや、やはりいきなり殴ることはないだろう、と思い直した。私は悪くない。

少年たちは、日々にキモイ、キモイと連呼した。自覚しているとはいえ、面と向かつて言われると、かなり傷つくものだ。だが、幻覚の苦痛ほどで

はない。初めて幻覚に感謝するべきだったかもしれない。

今日は初めて経験することが多い日だ。きっといい日に違いない。

気をよくした私は、感謝の意味を込めて、心底から笑みを浮かべ、通してくれないか、と彼らに言った。

結局、私が非常に気持ち悪かったためか、彼らは道を開けてくれた。

「ごめんなさい」

Sが急に謝った。

「なんで謝る」

理由がわからなかつた私は、聞いた。

Sが語つた内容は意外なものだつた。あの少年たちは彼女の同級生たちであること、彼らからSは悪質ないじめをうけていること。堰を切つたかのように彼女は語つた。

どうも少年たちが攻撃していたのはSの話しぶりからすると、私ではなくSだつたらしい。

週末、いつも時間があつた理由がわかつた。

私のような破綻した人間ならば、周囲から排除されても文句は言えない。しかし彼女のような、善性で知的な人間がなぜいじめられなければならぬのか。Sが言うには入学当初はうまく人間関係を運べたらしいが、もともと出しやばりがちな性格だった彼女は、周囲から徐々に嫌悪を買つたらしい。その積極性に私は随分と救われたが、反発する人間もいるらしい。そういえば、やはり積極的な性格だったRを、ひどく嫌つている人間もいたことを思い出した。

自分も学校では孤立している、と言つて励まそうかと思つたが、何の慰めにもならないと気付いてやめた。

「あと一年と少し我慢すればいいから」

自分に言い聞かせるように、語るSに私は言つた。

「同じ高校を目指さないか、見知つた人間がいるときつと良いと思う」

自分で言って驚いた。

「それは素敵だね」

ひの顔が、いつもの文学少女然とした表情に少し戻ったのを認め、わずかだが安心した。

あの夜以来、いじめは直接的なものから無視にかわったらしい。そのことに感謝されたが、あいにく理由は不明だ。外部であつても協力者がおり、しかもその顔を知っているなら状況も変わるのかも知れなかつた。

随分と楽になつた、とひは言つた。学年があがりクラスが変わり、状況がさらに改善すればいいと思つた。

次の夏、本格的に受験勉強に入るころ、ひと下の名前と連絡先を交換した。無論相変わらず苗字で呼び合つたが、学校で禁止されていた携帯電話の所持が、教育委員会の方針転換で許可されたころ、その通達を見て父に持たされた携帯電話で、ひと番号とアドレスを交換した。

ひは小学校のころから持つていたらしく、律儀にそんな決まりを守つている人間を初めて見たと、ころころと笑つた。

朝日が瞼を温めた。眠つていたらしい。どうせ降りるのは終点だが、少し不安になり時間を確認した。

周りを見るとまばらだが、乗客がいた。ひと出会つたころの、ほぼ記憶通りの夢を見ていた。なつかしさに頬が緩みそうになつた。悪い癖だ、外出しているときは気を張つていなくては、駅のホームの二の舞だ。これでも若いころよりは症状はましなのだ、見知らぬ他人がいるところで、気さえ弛緩させなければ、幻覚を見る確率は減る。教師というまるで適性のな

い職についてしまったために身に着けた、内心と表情の乖離の習性は私の症状の治癒に随分役立つらしい。

私のような、性格、能力ともに社会不適合がふさわしい人間が職にありつけたことは、いくつかの幸運による。

Iは大学の二学年上の男だった。いまでも彼を私は先輩と呼ぶ。

非社交的な私が、Iと知り合ったのは、やはりIが積極的に他人と関わる性質の人間だからだ。

Sと私は、目論見通りに、同じ県外の公立高校に入学することが出来た。その後大過なく高校生活を、帰宅部で満喫した。

Sとの関係は、互いに別の大学に入学した後も、現在まで継続している。

自分の学力に見合った、適当な公立大学の文学部に入学した私は、漢文学を専攻した。

理由は、極めて消極的なもので、最も人気がなかつたからだ。

当時日本の漢文学会では、訓読式の漢文解釈が力を失い、漢語そのままに読んで解釈する中文派が、主流だった。訓読式を続ける、私の研究室の老教授は非主流派にいるだけあって、頑固で偏屈だった。

所謂二呂、呂祖謙、呂祖儕兄弟研究の日本での第一人者を自称する、浙東功利学派の生き字引のような老人は、多くの少数派がしばしばそうなるよう、学会の方針に反発し、自らの研究室の方針を一層先鋭化した。学生たちは、訓読における、時代ごとの差異に細心に細心の傾注が要求された。特に、博士家各家の訓読を、しかも各家流の分派の訓読まで全て詣ん

じろ、などとどやされた学生までおり、老教授は、研究室に所属する数少ない学生の恐怖の対象だった。

彼は私が最も高頻度で、肉塊と怒鳴りつける白骨を見た人間だった。

肉塊に浮かぶ顔面は、すぐに憤怒の形相になり、怒鳴りつける白骨になり、また肉塊になり、白骨にどやされと、教授にどやされるたび、明滅する切れかけの蛍光灯のような光景は、奇妙なものだった。

幻覚の中にいるときは、ひの同級生たちとひと悶着あつた時もそ

だつたらしいが、非常に不遜に、黙しているように見えるらしい。一に指摘されて、私は初めて知つた。私が教授にどやされた回数がすでに、両手どころか、足の指を使っても足りなくなつたころ、あまり交流のなかつた私に一は言つた。

「お前もよくやる、十回以上先生に、二度と顔を見せるなと言われているのにな。そんなに漢文訓読が好きかい」

幻覚に落ちているとき、私は周囲の言葉が聞こえない。それほど言われたのだろうか。

私が驚きで、だまつていると、一は続けた

「先生も、お前の根性には、辟易しているらしい。その一点に於いてのみお前は見どころがあるとき

根性でもなんでもなく、ただ幻覚の中で、教授の肉塊と白骨の明滅に嘔吐を我慢していただけだが。

その日以来研究室で幻覚を見る頻度は、格段に減つた。

一は優秀な男で、教授のお気に入りであった。教授の無茶な要求に常に答えた。正直呪文にしか聞こえない菅家流や清家流の、東萊左氏博議の訓読をすらすらと諳んじる様は、頭脳の差というものを自覚せずには居られなかつた・

一はいろいろと顔の利く男だつた。県内の予備校や塾の漢文教師に、知り合いでない人間は居ないのでないか、と思えるほどで、私たち下級生だけでなく、場合によつては自分の上級生の働き先まで、口を利いた。

私も無論のことそれに甘えた。今のいくつかの高校での非常勤講師と予

備校講師の職も、彼に利いてもらった縁を始めに着けたようなものである。

また、学内の他の研究室との人脈も同じほどか、それ以上に豊かで、非主流派の我々が、卒論でどの素材を主題とすれば各教授の好感を得やすいかなどの情報収集を行い、それは常に正確だった。

そんなフィクサーまがいの働きをするIだったが、けつして親分肌といった男ではなかった。金銭での直接支援、ようはおごりの食事やレクリエーションのようなことは、一切しなかった。人脈だけで、恩をあらゆる場所に売り、それでいて金銭等の吝嗇をしめすことで、あえて完全に自分の評価を決して上げ切らず、適度な位置にとどめるという離れ業をやってのけていた。政治家にでもなるつもりかとも思ったが、老教授のもとで助手となることが確定したIの様子から、どうも学会での地位向上を目指しているらしかった。

学部卒で院に進まなかつた私は、教授の主宰した卒業祝いの飲み会で（この点老教授はこのような催しを自腹でするように、政治的駆け引きとは無縁の古風というか不器用な男だつた）

会のしめに研究室の幹部たちが各自言葉を述べた。

「学会の現状は、すぐに変わる。院に進まない卒業生はあるいは今日限りで今生の別れになるものもいるかもしれない。しかし諸君の半が進む受験業界においては我々はいまだ主流派だ。大学においてもすぐに反動があるので、安心して欲しい」

とIは述べた。

その後、助手が当たり障りのない、贈る言葉を述べ、最後に老教授の番となつた。

「宋代、当時の儒者の二大巨頭、朱熹と陸象山が人倫に於いて、性即理と心即理の二論を戦わせ、呂祖謙の招きで、鵝湖に於いて対面しての激論でむしろ喧嘩別れにおわつたことは、諸君らもよく知るところである。この儒学における一大論争は、結局は喧嘩別れに終わった。学説ならば強情をはるだけで良い。しかし諸君らがこれから生きる実社会では正論同士の戦いはもちろん、悪論により正論がねじ伏せられるようなことも、目撃し、

また当事者となつたとき、あるいは屈原となり、あるいは秦檜となるかも知れぬ。そのような事態に陥ることはなくとも、艱難は常に小さくとも必ずあるだろう。いかなる場所で働くにせよ、修養とは功利學派の一呂や葉適の解くところのよう具体的事物に於いてこそ成る。日常に埋没せず、空理に逃げることなく、日々直面する経験を大切に修養に努めれば、道は自から体得できるだろう。諸君の奮励を祈る」

老教授はどこまでも漢学者であつた。

【 】とは今生の別れとはならず、その後も連絡をとりあつてゐる。今度は私が業界の内情を流す側だつた。いつの間にか【 】の形成する派閥の末端である。【 】の嗅覚が正しければ、【 】は勝ち馬に乗つてゐたはずであり、おそらく今後私が食いはぐれることは、暫くないだろう。

列車が終点に着いた。ターミナルだけあつて、人間が多い。起き抜けにホームで幻覚を見た時の憂鬱は消え去つて、この分ならば、覚醒している間は幻覚を見ることがあるまい。

私の幻覚の原因は不明のままだ。

それは、承認欲求の暴走なのかもしれぬ、過度な人間不信なのか、あるいは脳髄の形状がおかしいのかもしれぬ。全く別の、本物の靈感なのかもしれない。だが現状、年を経るごとに私の感覚は、現実と調和している時間が伸びている。

真理をしらずとも、事象に対処は可能だ。幸運なことに現在は対処できている。現実主義に見せかけた現状主義で、今後もなんとかなるかもしれない。

できる限り速足で病院に向かつた。煙草をやめねばならないなど、呼吸への負担を大いに感じながら、時計を確かめた。七時を回つてゐる。仕事

の性質上、今の居を離れられない私に代わり、私の実家を手伝ってくれている妻の携帯電話に電話をかけてみた。疲労感を感じさせる声は、かつて夢見がちで、繊細な文学少女だったとは想像しがたい、しかし愛すべきものだった。

「おばあちゃん、まだ持ってる。急いで」

「わかった」

雜踏のどこからか、けたけたと嘲笑うこえが聞こえ、すこし吐き気がした。

終